The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	俳句
Author(s)	藤塚, 紅果
Citation	懐徳. 1935, 13, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

仲田應弘

軒下に居りてもまぶき飛行機は雲に入りたる音のとゞろく
青蚊帳の動く涼しさに更けゆきて庭畑の方に馬追の鳴く
原稿を書きし夕べの涼しきに雜誌よみつつ眠りたるかも
朝露の涼しきうちと草を引く縞の馬蘭は新葉張りあふ
ひるがへさぬ心をいきごほりをりつつも從弟率て來ぬあしかの前に（天王寺動物園）

藤塚紅果

俳句

庭廣う椿に住める蕖家かな
この村の孟宗藪や落椿
牛の影映れる池や蓮華草
この藤よ永久に傳へよ德と名を（藤樹書院にて）
聖逝きて三百年なる藤の花
たんぽぽや友仙流す加茂の水
頂上や霞の中の京大津

御佛の居ならび給ふ春寒し（室生寺）

新緑の谷深からず水車小屋

落つ雲雀まばらにのこる草の影（野は住宅に化す）

雲雀の子捕へて子供歸りけり

日盛りや嚠喨としてピアノの音

玄海に出會ひし船や夏の月

夏の月波より低き淡路島

船曳いて大淀上る夏の月

安治川の舟のたまりや夏の月

出水の濁り殘りて夏の月

夏の月塔の九輪を放れたり（清水）

御野立の丘見はるかす草紅葉

草紅葉築土崩るゝ奈良の雨

宿題に子等忙しく秋暑し